＜技術報告＞

野生ウズラのツキ網猟および日本における野生ウズラの
捕獲羽数の推移に関する考察

木 村 正 雄

岐阜大学農学部, 岐阜市 501-11

ウズラ *Coturnix coturnix* はキジ科の鳥のうち最も小形で、草原にすむ地上性の鳥である。アジア産の *C. c. japonica* とヨーロッパ産の *C. c. coturnix* があり、これらは鳴き声、繁殖期における雄の顔からのどにかけての羽色、および雑種では妊性が不完全なことなどの点で異なるとされている。数年前、北米の鳥類学者連合がアジア産のウズラに *C. japonica* の学名をつけること、すなわちこれら2つのウズラを種のレベルで区別することを提案したことにより¹⁾、この分類が使用されるようになった^{2,3)}。

ウズラは飼育が容易であることに加えて、性成熟が早く、しかも多産であることから、家禽または実験動物としての地位を確立した。また猟鳥としても好まれ、アジア各地から北米やハワイ諸島に輸出されたり^{4,5,6,7)}、国内でも猟鳥としての数を確保するため猟友会などにより再野生化が試みられたりしている。人工飼育については中国は2,000年の歴史をもつといわれている⁸⁾。日本でも、慶長から寛永の時代に盛んに雄の鳴き声を競う鶉合が行われたとの記録があり、この頃に飼養されていたと考えられる⁹⁾。現在の家禽ウズラは明治から大正にかけて作られたといわれている¹⁰⁾。ウズラはわが国で家禽化された唯一のものであり、さらに原種が現在でも比較的容易に入手できる利点を有する。また他の家畜家禽に比べると遺伝的荷重も大きく¹¹⁾、家畜化の過程にあるといってもよい。従って、家畜化あるいは品種分化に関する遺伝育種学的研究の対象として好適と考えられる。著者は多数の関係者の協力を得ながら野生ウズラに関する調査研究を行っているが、その過程でユニークな野生ウズラの猟法を見聞することができた。野生ウズラの入手という点でこの情報は役立つと考えられる。一方、野生ウ

ズラが最近激減したといわれている。本報告は、野生ウズラの猟法ならびに日本における野生ウズラ捕獲数に関する調査結果について述べるとともに、これらについて考察を加えた。

鹿児島県串良町の武 義雄氏は、網猟による野生ウズラの捕獲を多年続けている。使用する網は「ツキ網」と呼ばれるものである。「解説鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」¹²⁾に、ツキ網とは手で携行して鳥に接近し、これをつき出してかぶせることができるようにつくられた網とされ、昭和38年に法定猟具として農林大臣により承認されている。武氏所有のツキ網の概略は次の通りである。2本の竹をV字型にして、畳2枚分位の投網を少しゆるめに張り、さらに1本の竹を柄としてとりつける。その結果、約4.5メートルのY字型の竹のフレームに網を張った状態となる。網尻には紐がつけてあり、ウズラを捕獲する時にこの紐を手元で操作して網の張り加減を調整できるように、柄のところまで紐を延ばした組立て式のタモ網である。応用動物学¹³⁾に網を用いた各種の鳥類捕獲装置が「林野庁編(1969):鳥獣行政のあゆみ」から引用・図示されているが、三角形の枠に網が張ってある「ツキ網」よりむしろY字形の枠に網が張ってある「ナゲ網」に近いものである。

猟犬としてはポインターかセッターが使われる。武氏は長らくポインター雑種の雄を使用していたが、現在はセッターの若犬を使っている。セッターの方が性格がおだやかで猟以外のことにあまり気を取られないとのことである。ツキ網猟の猟果に対する貢献度は犬8:人2くらいの比率であるといわれている。若犬の訓練開始時としては約4カ月齢位が適当という。完全に犬を訓練するには約3年を要し、一般に7~8歳齢まで猟に使えるので、効果的に使用できるのは4~5年の間となる。

猟法は非常に簡単で安全なものである。犬がポイントした地点を、雑草などとともに網をおさえ込む。驚いて飛びあがったウズラが網目に首や脚、翼などを絡めたとこを捕える。ハンターは、犬の鼻先きと尻尾の動きで

A traditional method for capturing wild Japanese quail and profile of the number of quail captured in Japan during the past sixty years. Masao KIMURA, Faculty of Agriculture, Gifu University, Gifu 501-11.

1990年10月5日受付

獲物の位置を知って網をかぶせるので、直接にウズラをみているわけではない。武氏によると、網をふせた時に10羽のうち5から7羽は動かない。網を上から叩くとウズラは飛びあがるという。草などの遮蔽物の上からおさえ込むので、その時の網の張り方の調整は難しい。以前は、犬のポイントした地点を中心に3人位がタモ網を同時に構え、合図で飛びあがらせたウズラをいずれか1人が空中で掬め捕る方法であった。しかし、これでは経験と資格をもった人を揃えるのが難しく、現在のような方法になったという。

武氏は猟場への往復にも犬を綱などで拘束せず、猟場で犬はウズラの気配や匂いを感じると追跡を始める。付近の2カ所以上にウズラが潜んでいると犬は混乱して、複雑な走り方をする。この場合にはハンターが合図して犬を引き上げ、別の場所へ移動する。犬が追跡をはじめてからポイントした地点までの距離は、無風状態で50メートル位の場合が多いとのことである。

解禁直後（11月中旬）はウズラの渡来数も少なく、また犬がポイントしてもウズラの行動が早くて猟果はあがらないといわれている。12月頃になると田圃1枚分位しか飛ばなくなり、この時期が最適な猟期である。1月中旬を過ぎると動きが激しくなり、2月に入ると一層動きが激しくなり、ウズラに近寄ることが困難となる。また一日の中で、朝と午後3時以降は採餌のためウズラの行動が活発となるため、猟に適する時間は一日のうちわずかの時間に限られるという。これに対し、吉村¹⁴⁾は、早朝露霜のある間は雑草や土穴の中にうずくまり、日中暖かくなると広く走り廻り、夕方になると畑や草の刈り跡などの広い場所へ出てくるので、夕方がウズラの猟に最適と述べている。

鹿児島県串良町では、ウズラのツキ網猟は12月頃が適期としている。他方高知県香南猟友会の名倉元広氏によれば、場所によって留鳥となって夏を越すウズラもあるが、正月過ぎに渡ってくるものも多いので、新春以降に出猟するとのことである。千葉県印西猟友会の金子薫氏は、土地ウズラ（一年中棲んで繁殖しているもの）もいるが、その他に月夜の晩に渡って来る集団があり、この渡りウズラの猟は2月になるという。ここでのウズラの渡りのルートは明らかでないが、同氏は朝鮮から来るのではないかと、いう。静岡県西富士山麓猟友会の佐野武夫氏も、地ウズラの他に、例年1月頃になると信州方面からやや体の大きいウズラが移動してくる、という。

上記のように、各地でウズラの渡来時期および猟の適期が異なる。このような情報を集めることは、日本における野生ウズラの移動ルートやその集団数を明らかにする一助となるであろう。

わが国においては、明治6年に鳥獣猟規則が制定され、次いで明治25年にこれまで銃猟のみが規制対象となっていたのに加えて、銃器以外の猟法も規制をうけるようになった。大正7年に、狩猟鳥獣の範囲を決めるとともに、他はすべて保護することとし、同時に猟区の設定がなされた。その後狩猟鳥の一人一日当り捕獲数の制限、狩猟方法の制限、鳥獣保護区の制度などが設けられた。昭和38年、狩猟法という名称が「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」に改められ、鳥獣保護の思想が一層明確にされて現在に至っている。ウズラの場合、昭和38年に一日一人当りの許可羽数が10羽以内とされ、現在は5羽となっている。

狩猟者登録をうけた者による鳥類捕獲数のうち、野生ウズラの捕獲数を図1に示した。シーズン毎に都道府県から環境庁に提出された捕獲数に基づく鳥獣関係統計から数値を引用した。図にみられるように、過去約50年にわたり捕獲羽数は減少し続けている。増減はあるものの、1925（大14）年から約10年は年間平均約40万羽の捕獲が可能であった。しかし1937（昭12）年に第1の激減が認められた。この理由は不明であり、特に留意しなければならぬ法律の改正もなく、ハンター数の減少も認められない。日中戦争がこの年7月に勃発しているが、これが原因となりうるかは明らかでない。その後約30年間、多少の増減がみられるが、年間約16万羽の捕獲が続けられた。1968（昭43）年に第2の減少がみられ、これは1963年の捕獲羽数制限が遠因となっていると推察される。その後10年余、年間約4万羽の低いレベルで捕獲数はかなり安定していたが、1983（昭58）年以降は年間1万羽をкаろうじて保って現在に至っている。

野生ウズラの捕獲状況を地区別に示すと表1となる。昭和末期ではすべての地区においてそれ以前の期と比べて捕獲数が激減している。その数値は北海道・東北地区と九州地区を除いて、最盛期のわずか数パーセントである。ただし、例外の2地区では過去40年間の捕獲数に他地区ほどの著減がみられない。これらの捕獲状況の推移の原因として、法律の施行やウズラを捕獲する人の減少なども考えられるが環境変化に基づく野生ウズラ数の減少が大きいと考えられる。茨城県猟友会、千葉県猟友会、また前述の静岡県や高知県のハンター達も、ウズラの渡来数は確実に減っているといっている。前述の武氏によれば、昭和57年を境に、ウズラだけでなくヤマバト、ツグミ、メジロなども少なくなってきたという。

わが国における野生ウズラの移動ルートには2通りが知られている^{15,16)}。一つは北海道・東北地方で繁殖して

図 1. 各狩猟シーズンにおける野生ウズラの捕獲羽数

表 1. 地区別の野生ウズラ捕獲羽数 (10 年間の合計羽数)

期 間	北海道 東北 (1道6県)	関 東 (1都6県)	中部 (9県)	近畿 (7県)	中国 (5県)	四国 (4県)	九州 (7県)	計* (1道1都 44県)
1925—1934	107,172	882,424	632,608	468,474	125,620	589,210	1,353,526	4,159,034
1935—1944**	36,716	443,328	351,060	221,621	45,813	273,313	557,849	1,929,700
1945—1954**	24,125	549,098	379,535	176,301	23,514	197,553	230,313	1,598,439
1955—1964	37,314	515,491	373,863	123,095	25,333	141,678	185,845	1,402,619
1965—1974	35,879	209,286	147,670	51,871	6,708	69,634	198,621	719,669
1975—1984	19,958	68,033	29,625	8,446	3,107	40,695	170,680	340,544

* 沖縄については、859羽のウズラがこの60年間に捕獲されているが、記録が不完全であるので、表からは除いた。

** 1943～1945年の記録はないので正確には10年間ではない。

冬期に南下するルートで、他の一つは朝鮮半島を繁殖地として越冬のため九州地方に渡来するルートである。表1に示された推移から、北海道・東北地区で繁殖地の環境劣化がおこり、ウズラの数が次第に減少し、その影響が本州や四国の捕獲数減少に現われているのかもしれない。一方、九州地区は朝鮮半島から渡来するウズラがいるので、それほど捕獲数減少を招来していないと考えることができよう。しかし、蛋白質を支配する座位を用いて調べた結果は、静岡、高知、鹿児島野生ウズラ集団が異なるものであると結論できるだけの遺伝子組成の差は認められていない。

ヨーロッパにおいても、野生ウズラの数減少しており、その原因として乱獲と保護管理対策の遅れが指摘されている¹⁸⁾。日本の野生ウズラの場合には乱獲の記録がみられないので、繁殖地や越冬地、あるいは留鳥となった鳥たちの棲息地における環境の変化や汚染が大きな原

因となっている可能性が考えられる。第2回緑の国勢調査(1978年度)の結果では2,225の調査ポイントのうち8ポイントでウズラの繁殖が確認され、46ポイントで繁殖の確認はできなかったものの繁殖の可能性があると考えられているにすぎない¹⁶⁾。例えば牧草地に変えられるとウズラの餌がなくなり(鹿児島と高知)、また遮蔽物もなくなる(静岡)ので、ウズラはそこに棲息しなくなる。日本における野生ウズラ数の減少の実態と、開発に伴う彼らの生態的变化を明らかにすることは、重要な一課題となると考えられる。

(家禽会誌, 28: 166-169, 1991)

キーワード: 野生ウズラ, 狩猟, ウズラ

引用文献

- 1) American Ornithologists' Union (1983) Check-list of North American birds, Allen

- Press, Inc., Lawrence.
- 2) HOWARD, R. and A. MOORE (1984) A complete checklist of the birds of the world, MacMillan, London.
 - 3) CRAWFORD, R.D. ed. (1990) Poultry Breeding and Genetics, Elsevier, Amsterdam.
 - 4) SCHWARTZ, C.W. and E.R. SCHWARTZ (1949) A reconnaissance of the game birds in Hawaii, Board of Commissions of Agriculture and Forestry, Territory of Hawaii.
 - 5) PALMER, T.S. (1922) Game as a national resource, USDA Bulletin No. 1049, Washington, D.C..
 - 6) PHILLIPS, J.C. (1928) Wild birds introduced or transplanted in North America, USDA technical Bulletin No. 61, Washington, D.C..
 - 7) McATEE, W.L. (1929) Game birds suitable for naturalizing in the United States, USDA Circular No. 96, Washington, D.C..
 - 8) 陳 蘇編著 (1985) 觀賞鳥飼養百問百答, 香港得利書局, 香港.
 - 9) 荒木彦助 (1920) 鳥類籠養の沿革, 鳥, **2**: 244-247.
 - 10) 近藤恭司 監修 (1983) 実験動物の遺伝的コントロール, ソフトサイエンス社, 東京.
 - 11) KAWAHARA, T. (1976) Genetic loads in wild and domestic Japanese quails, Ann. Rep. Natl. Inst. Genet. (Japan), No. 26: 76-77.
 - 12) 農林法規研究委員会 (1969) 鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律 (解説), 大成出版社, 東京.
 - 13) 草野忠治他共著 (1981) 応用動物学, 朝倉書店, 東京.
 - 14) 吉村九一 (1940) 鳥獣の攻方及出猟心得, 照林堂書店, 東京.
 - 15) 清棲幸保 (1979) 日本鳥類大図鑑 II. 講談社, 東京.
 - 16) 環境庁編 (1981) 日本産鳥類の繁殖分布, 大蔵省印刷局, 東京.
 - 17) 木村正雄・藤井貞雄 (1989) 野生ウズラと家禽ウズラ集団における遺伝的変異性, 家禽会誌, **26**: 245-256.
 - 18) PETERSON, R. (1969) ライフ大自然シリーズ鳥類, タイムライフ インターナショナル, 東京.